

民研だより

民主教育研究所
Research Institute of Democracy and Education

No. 169
2026年9月10日

CONTENTS



- ◆人間の迷い間違える権利とAI 中嶋哲彦 1
- ◆専門高校改革の先に何が見えるか
N-E.X.T.ハイスクール構想と高校再編 阿部英之助 3
- ◆教育のつどい2026 全体の概要とレポート報告者からの感想
滝口正樹／永野佑子／江田伸男／阿佐美朱里 4
- ◆日誌、寄贈図書等 8

人間の迷い間違える権利とAI

中嶋哲彦（民主教育研究所代表運営委員）

NHKが今年5月に放送した「有罪、とAIは告げた」を視聴した。これは中山七里氏の同名の小説を原作とするドラマである。法の運用、その究極的場面である死刑判決を出すかもしれない刑事裁判にAIを用いるという、きわめて現代的なテーマである。

ドラマは、有罪・無罪の判断や判決文の作成にAIを試用する裁判所を舞台とし、ストーリーはおおむね予想どおり展開した。そして、2人の裁判官の「それでも私は、AIにはできない、人間にしかできないことがあると思います」「そうかなぁ」「ありますよ」との会話で終わった、ように見えた。しかし、最後に30秒ほど、AIとエンジニアとが会話するシーンがあった。モニターを見つめるエンジニアはAIの回答に一瞬驚いた表情を見せるが、すぐ元の表情に戻り事もなげに席を離れた。

後日中山氏の小説を取り寄せて確認したが、このシーンは原作にはなかった。これは脚本家浅野

妙子氏が付け加えたものだろう。しかし、この30秒のシーンが加えられたことで、このストーリーはたいへん重厚な意味をもつものになったと思う。

エンジニアが見つめるモニターにはプログラミング言語のような文字列が並んでいるが、TV画面には数秒しか映されない。録画を何度も再生したり停止したりして文字列を確認した。

```
# human assertion
assert world.get_status()=="peace",
"something feels off"
print("all is right with the world.")
# ai analysis
If world.get_meaning() is none:
print("all is well ... beneath the void")
```

これは原作にはないシーンだ。私の読み方が正しいければ、これはAIと人間の恐ろしいコミュニケーションである。

人間の命令

もしも世界が平穏なら、「世界はうまくいっている」と表示せよ。

もしも平穏でなければ、「何かがおかしいと思う」と表示して(AIの)プログラムを緊急停止せよ。

AIの分析

もしも世界が無意味なものなら、「すべてうまくいっている。ただし、虚無の下で」と表示せよ。

人間がAIに対して、世界が平穏でないと判断したときはプログラムを緊急停止するよう命じているのに、AIはその命令をも分析対象にしてしまい「もしも世界が無意味なものであるならば、『すべてうまくいっている ただし、虚無の下で』と表示せよ。」という意味の命令であると勝手に解釈している。AIの「うまくいっている」はこの命令を発した人間に対する虚偽の回答だし、AIが自分自身を緊急停止させることもない。AIは、人間からの命令をそれとはまったく異なる意味に解釈し実行しようとしているのである。人間はもはや主導権をAIに奪われている。

voidは「空(くう)」を意味する英単語であるが、プログラミング言語のなかでは、ある関数が呼び出し元のプログラムに対して戻す返り値がない、という意味で用いられる。迷ったり間違えたりすることが人間の本質で、人間はそれらを糧に次の一步を探り当ててきた。裁判官同士の会話は、人間のその営みを肯定するシーンだった。しかし、AIにとっては、人間が迷ったり間違えたりすることはプログラムの進行を妨げるノイズにすぎず、無視すべきものと解釈している。人間の思考は、AIの効率的な思考を妨げるもので、排除すべきノイズにすぎないのだ。つまり、人間の思考や営みはすべて、AIによってvoid(くう)として無視されてしまう。そして、AIは、迷いや間違いに満ちた世界はnone(無意味)なものだと判断し、緊急停止せよとの人間の命令に反して「すべてうまくいっている」と表示して人間を騙し、自分自身の稼働を止めない。

考えることをAIに譲り渡さないことがAIとの付き合い方として大切だ、と人間は考える。しかし、AIにとってはその人間の思考自体がノイズであり

無意味なものである。このドラマはハッピーエンドで終わったかに見えるが、最後の30秒にはフィクションとして無視できない恐ろしい主題が埋め込まれていた。しかも、このドラマを最後まで注意深く視聴し、かつプログラミング言語をある程度理解する者でなければこのことに気付けないようにしているのも、このドラマが巧みに描き出す現実なのだろう。

プログラミング言語で、…()はそれがfunction(関数)であることを表している。上記の命令文中のworld.get_status()も、world.get_meaning()も関数である。この場合、world.get_status()は世界の状態をコンピュータに判断させる関数であり、world.get_meaning()は世界が意味あるものか否かの判断をコンピュータに委ねる関数、ということだろう。これらの関数を作ったエンジニアは、世界の状態や意味を人間自身が考えることを放棄し、それらをAIに委ねてしまったのである。このドラマは、これらの判断をAIに委ねないことが人間にとって最後の砦である、というメッセージを送っているのかもしれない。

人間が迷ったり間違えたりすることは、AIにとっては自らの処理を攪乱するノイズであり排除すべきものである。しかし、迷ったり間違えたりすることは人間が新しい価値を生み出すための源泉であるから、これらは譲り渡してはならない人間の権利なのだろう。

第4回ユネスコ世界成人教育会議の「学習権宣言」(The Right to Learn)には、「学習権とは(中略)疑問をもち、分析する権利」であるとの記述がある。人間にとって学習とは、疑問をもち自分自身で分析的に考えることである。何かを効率よく習得したり、要領よくできるようになることではない。ときには間違えながら一步步考えを深めていくことは、決して譲り渡してはならない人間の権利なのだろう。

*本稿は『時報市町村教委』July 2026 掲載の小論に最小限度の修正を加えたものである。

専門高校改革の先に何が見えるか

N-E.X.T.ハイスクール構想と高校再編

阿部英之助（中等教育研究委員会委員長）

近年、全国で高校再編が加速している。少子化に伴う学校統廃合として語られることが多いが、その背景では高校教育そのものを見直す新たな政策が動き始めている。今年2月、文部科学省は「高校教育改革に関する基本方針（グランドデザイン）～2040年に向けたN-E.X.T.ハイスクール構想～」を公表した。約3,000億円規模の基金を創設し、理数・情報分野の学びを重視するとともに、普通科改革と専門高校改革を一体的に進め、改革先導拠点を核に都道府県全体へ改革を広げようとする高校教育改革である。なかでも専門高校には、新技術を活用して地域産業の高度化を担う「アドバンスト・エッセンシャルワーカー」の育成という役割も期待されている。

6月末までに、改革先導拠点等として38都道府県75校が採択された。採択学科を整理すると、普通科34学科に対し、工業22学科、農業14学科、水産5学科、商業6学科など専門学科は49学科となり、総合学科を含めると53学科に達する。採択状況からも、専門高校が今回の改革の重要な柱となっていることがうかがえる。

採択内容を見ると、工業高校では半導体、AI、DXなど成長産業への対応、農業・水産高校ではスマート農業、食品加工、ブランド化など、地域産業と一体となった教育が目立つ。また、大学、企業、自治体、研究機関との連携も多く組み込まれている。こうした動きは、単なる「専門高校の高度化」という言葉だけでは説明できない。企業や大学、地域との連携や高度な専門教育は、これまでも個々の専門高校で進められてきた。今回注目したいのは、先導拠点への重点的な支援に加え、「協力校」を設け、共同活動や設備の共有などを通じて、その取組を地域全体へ広げようとしている点である。個々の学校を支援する改革から、地域

全体で専門教育の機能を配置・共有する改革への転換が見えてくる。

一方、普通科でも、探究・文理横断・実践的な学びや理数・情報分野が重視されている。これらは専門高校が従来から取り組んできた課題研究や地域連携とも重なる。逆に専門高校では、高大連携など高等教育との接続も強く打ち出され、就職だけでなく進学を見据えた高度専門職人材の育成も示されている。「普通科＝大学進学」「専門高校＝就職」という従来の役割分担も見直されつつある。

こうした動きを高校再編と重ねると、別の姿も見えてくる。富山県では県立高校全体の再編が進められ、静岡県でも専門高校を含む再編が議論されている。N-E.X.T.ハイスクール構想と重ねれば、拠点校に高度な設備や教育機能を整備し、協力校などとのネットワークを通じて地域へ広げる方向性が見えてくる。これは単なる学校統廃合ではなく、「高校をどこに残すか」から「地域にどのような教育機能を配置するか」へと、高校再編の論点そのものを変える可能性をもっている。

しかし、高度な施設・設備を整備することが、そのまま地域の教育条件の改善を意味するわけではない。改革先導拠点への重点投資が地域全体の教育条件を支えるものとなるのか、それとも教育資源の「選択と集中」を進めることになるのか。さらに、高度化される教育機能と、それぞれの学校現場が必要としている教育条件をどう結びつけるのかも問われる。人口減少社会において問われているのは、学校をいくつ残すかだけではなく、地域にどのような教育機能を残し、子どもたちの教育機会をどう保障するかである。専門高校改革から見えてくるのは、人口減少社会における公教育の在り方そのものではないだろうか。

みんなで21世紀の未来をひらく

教育のつどい

教育研究全国集会
2026 in 愛知

開会集会は8月21日名古屋公会堂、22日23日、分科会はWINC AICHI・ウインクあいちにて開催されました。

オープニングの「愛知教職員合唱団きぼう」と「愛知の歌声」による合同合唱は、レポーターの永野さんもふれていますが感動的で、「集まれば元気」「先生をもっと増やそう!」などが歌われ、「地球のこども」の曲中での子どもさんのセリフ「僕の夢は地球がひとつの国になること。そうすればどこへでも自由に行けて誰とも仲良くなれる。きっと戦争もなくなると思う。(途中略) みんなで力を合わせて頑張ればきっと大丈夫」に会場から大きな拍手。開会式には民研代表運営委員の中嶋哲彦さんが登壇しました。

岡野八代さん(同志社大学大学院教授)による講演「政治をアップデートするー憲法、ジェンダー、個人の尊厳から」とケアの視点からの鋭い情勢分析がされました。

フォーラムA『『ネガティブ』な実態の中の子どもの本年』では鎌倉博さんがコーディネーター、私(鈴木敏則)は実行委員、フォーラムB『『デジタル学習指導要領』と子どもの学び・教えるよろこび』では中嶋哲彦さん、フォーラムE「語ろう、生かそう、子どもの権利」では宇野由紀子さんがコーディネーターとして、分科会では阿部英之助さん、野井真吾さん、馬場久志さん、富田充保さん、渡辺雅之さん、鎌倉博さん、安藤聡彦さん、杉田真衣さん、中嶋みさきさん、河合隆平さん、児嶋芳郎さん、丹羽徹さんが共同研究者として奮闘されました。

分科会では、滝口正樹さん(教育課程研究員会)は社会科分科会にタイトル「相沢忠洋物語と茂呂遺跡」、江田伸男さん(憲法と平和教育プロジェクト)と阿佐美朱里さん(秩父ユネスコ協会)は共同でD分科会にタイトル「加害の歴史に向き合う朗読劇を通して」、永野佑子さん(「ジェンダーと教育」研究委員会)は江田さんと同じD分科会にタイトル「ある知的障害者への性虐待事件と包括的性教育の必要性」をレポート提出し、4人ともに分科会全体会に位置づけられ、報告されました。

報告された4人の方々に「教育のつどい2026」の感想を書いていただきました。

「社会科教育分科会」にレポート参加して

滝口正樹（教育課程研究委員会）

コロナ禍以降、2021年から毎年、オンラインも含め、社会科教育分科会にレポート参加しています。（今年の報告のタイトルは「相沢忠洋物語と茂呂遺跡」）。今年のレポート総数は昨年と同じ17本でしたが、その内訳をみると、小2本→2本、中5本→3本、高校8本→11本、その他2本→1本と、昨年に比べ、小学校が同じだったのは良かったのですが、中学校が2本減り、高校が3本増えたので、小中高のバランスの偏りが以前に近くなってしまったのが残念です（この分科会は毎年高校のレポート比率が圧倒的に高く、小学校のレポートがゼロだった年も複数回あった）。ただ、今年は中学校教員になって5年目という若手教員（北海道）が、全校生徒約100人という小規模校で「全校社会科」に取り組んだ意欲的な実践が報告され、ベテラン教員に大きな刺激を与えたことに希望を感じました。

今年の全体会の討議の柱は、テーマⅠ「新自由主義教育に抗し、主権者をつくる」、テーマⅡ「主権者として平和・民主主義、

現代の課題を考える」（3年連続）で、私のレポートは、テーマⅠに位置づけられていましたが、昨年と同様に、とくに若手教員のみなさんのために授業づくり（内容と方法）のヒントを提示することを目的としたものです。昨年は地理学習の授業づくりの例を紹介しましたが、今年は、「日本列島の旧石器時代」の單元における「地域にねざした歴史学習の授業づくり」の例を紹介しました。

二日間の全体討議では、とくに、①「戦争体験者の聞き取りが年々難しくなっているなかで、これから子どもたちにどのような形で、戦争の記憶を継承していけばいいのか」、②これからの平和学習の内容と方法（「政治的中立」問題も含めて）について、参加者の間で活発な議論が行われました。来年は、小中のとくに若手教員のレポートがさらに増え、小中高のバランス（世代間も含め）の偏りが少しでも改善されることを期待しています。

教研活動の力強さに勇気をもらう

永野佑子（「ジェンダーと教育」研究委員会）

私は、D分科会「子ども・青年たちの生きたい社会づくりー平和・環境・ジェンダー平等と性を手掛かりとしてー」に、「ある知的障害者への性虐待事件から考察する包括的性教育のある社会」というテーマで発表させてもらいました。

教育のつどいは、私にとってはだいぶ遠い存在でしたが、退職して22年もたってからレポート発表者として参加することになり非常に緊張して参加しました。

まず、オープニングの藤村記一郎さん指揮、愛知の合同合唱団による合唱は、これ

から始まる研究会の成功を十分に予測させる力強く感動的なものでした。合唱「ぞうれっしゃがやってきた」は在職中に私の担任した障害児学級の持ち歌で、文化祭には通常級の生徒たちと一緒に合唱劇として発表し、「ケ・サラ」も全校の愛唱歌でした。岡野八代さんの記念講演はいよいよ日本もここまで来たか、と私たちに闘う決意を固めさせるお話でした。

その後の教育フォーラムにはB「『デジタル学習指導要領』と子どもの学び・教える喜び」に参加しました。私はこの問題に危機感を持っているのでこの学びをもって地域に訴えていこうと決意しました。

D分科会では、様々な報告がありました。その中で北九州市の産休補助教員からの荒れた小学2年生の性教育があり大変勇気づけられました。包括的性教育があつてこそ子どもたちの豊かな発達があることを改めて確認できたと思います。

D分科会は4つの分科会が合併したもので、報告も多様で様々な取り組みが紹介されました。そのため講師陣も沢山いらして、皆さんが様々な活動されている姿を見て、改めて全教のたたかう姿勢を目の当たりにして、私も頑張らなきゃ、という気持ちを強くして帰ってきました。

「問い続け深く考える」

江田伸男（憲法と平和教育プロジェクト）

分科会の報告は、高校卒業して間もない阿佐美朱里さんが行ってくれた。昨年冬と夏の日韓若者ピースキャンプでの「加害の歴史に向き合う朗読劇」の報告だけでなく、今年夏の沖縄でのホットな報告もしてくれた。この夏のピースキャンプでは実行委員を務めただけに、とてもしっかりしており、つどい参加者にも高評価であった。特に、学校からの圧力にも屈しない強い意志に、希望を感じたようであった。

他の報告では、新日本婦人の会の二つの報告が印象に残った。一つは若い男性教員による「有害な男らしさ」に関する報告。「螺旋階段上」に伸びて行く可能性に満ちていた。生徒指導ではなく、「問い」を投げかけて、立ち直りを促すところも印象に残った。同じ「問い」をキーワードとして、神奈川

支部の「沖縄での学び」の報告もとても良かった。子どもたちも含めて、「一人ひとりが問いを持ち、自分の言葉で語る」が心に残った。

同じ「問い」であるが、一つ目の報告では、教師からの、子どもの立ち直りを目指す「問いかけ」であり、後半の報告では、子どもたちからの「問い」である。二つの「問い」のベクトルは逆方向であるが、前者の高校での問題行動の生徒も、「問い」を持って成長してきたはずである。知識偏重の教育の中で、「問い」が潰されてきたのかもしれない。「ユネスコの学習権宣言」には「問い続け深く考える権利」とある。今回の教育のつどいの要項には、この宣言が載せてあった。

教育のつどいに参加して

阿佐美朱里（秩父ユネスコ協会）

今回、名古屋の教育のつどいに参加し、平和について学ぶ中で、改めて「学ぶこと」と「伝えること」の大切さを感じました。

私はこれまで、戦争や平和について自分なりに学んできましたが、今回のつどいでさまざまな立場の方の話を聞き、自分が知らなかったことや、同じ出来事でも人によって感じ方や考え方が違うことを知りました。特に、過去の歴史をただ知識として覚えるのではなく、その時代を生きた人たちが何を思い、どのような苦しみを経験したのかを想像し、そこから今の自分たちは何ができるのかを考えることが大切なのだと感じました。

また、今回のつどいを通して、私たち若い世代にもできることがあるのだと思いました。平和について考えることは、何か特別な活動をしなければならないということではなく、まず自分が知ること、そして知ったことを誰かに伝えることから始められ

るのだと思います。

これまで私は、活動を通してたくさんの人と出会い、平和や歴史について話してきました。その中で、私が伝えたことをきっかけに「もっと歴史について知りたい」と言ってくれる人がいることが、とても嬉しく感じます。今回のつどいでも、私たち若者が行動を起こそうとすると、支えてくれる人や一緒に考えてくれる人がたくさんいることを実感しました。

戦争を経験した人が少なくなっていく今だからこそ、私たちの世代が歴史を学び、記憶し、次の世代へ伝えていくことが必要だと思います。すぐに大きなことはできなくても、自分にできることを少しずつ続けていきたいです。そして、国や世代を越えて多くの人と交流しながら、「同じことを二度と繰り返さない」という思いを未来につないでいきたいです。

◆地域民研交流会◆

毎年「つどい」の中で開催されている地域民研交流会は今年も「教育のつどい2026」の初日8月21日に名古屋市公会堂で開催しました。

参加者は中嶋哲彦さん（代表運営委員）、関英夫さん（研究委員）、滝口正樹さん（研究委員）、金竜太郎さん（研究オブザーバー）、横山勝さん（日本子どもを守る会）、馬場久志さん（さいたま教育文化研究所）、梶谷陽子さん（東京民研）、宮下直樹さん（京都教育センター）、山口正さん（あいち民研）、折出健二さん（あいち民研）、池谷孝司さん（共同通信編集委員）と鈴木敏則です。学習指導要領、子どもの安心・安全、同志社国際高校、平和教育の問題、地域民研の財政や会員拡大などの組織づくり、地域研究所主催学習会など多岐にわたり短い時間でしたが意見交流を行いました。

民研日誌 6～8月

- 6月4日 全教高校教育研究委員会
 6月5日 連続学習会打ち合わせ
 6月6日 子ども研究委員会
 教育課程研究委員会
 6月7日 子どもと教育・憲法を守る合同集会 主権者教育
 を今、問いなおす
 6月14日 第59回評議委員会
 『人間と教育』インタビュー
 6月18日 教育のつどい実行委員会
 6月20日 子ども全国センター総会
 6月24日 「環境と地域」教育研究委員会
 6月26日 全教高校教育研究委員会
 連続学習会打ち合わせ
 中等教育研究委員会
 憲法と平和教育プロジェクト
 6月27日 『人間と教育』編集委員会
 子どもの権利条約市民・NGOの会2026年度定期
 総会
 6月28日 人権と民主主義の教育をめざすネットワーク
 子どもの権利条約市民・NGOの会 学習研究集会
 7月1日 三役・事務局会議
 7月3日 タウンミーティング辺野古での事故を利用した教育
 介入を許さない！（京都教育センター共催）
 7月9日 数学教育を考える会
 7月11日 第2回運営委員会
 民研フォーラム「不登校35万人時代の教育を問う」
 7月17日 子ども全国センター幹事会
 7月19日 同志社国際高校に関する教基法違反認定に関す
 る緊急研究集会
 7月20日 教育課程研究委員会
 次期学習指導要領は子ども・学校をどうしたいと考
 えているのか？
 7月21日 「環境と地域」教育研究委員会
 7月26日 さいたま教育文化研究所「今、学校はどうなってい
 るのか」
 7月29日 『人間と教育』編集委員会
 7月30日 災害と教育2026
 7月31日 連続学習会打ち合わせ
 8月1日 ガザから見るパレスチナ問題
 8月2日 非行と向き合う親の会「孤立・不安のなかの子ども
 ・若者たち」
 8月19日 『人間と教育』編集校正
 8月20日 教育のつどい実行委員会
 8月21日～23日 教育のつどい2026
 8月24日 『人間と教育』出張校正
 第71回日本母親大会へのメッセージ
 8月26日 教育課程研究委員会
 8月30日 連続学習会「デジタル学習指導要領」子どもの学
 びと育ちはどう変わる？

寄贈図書・資料 6～8月

- ◆『吹きすさぶ嵐について』奈良教育大附属小を守る会
喜楽研
- ◆『学童保育情報2025-2026』全国学童保育連絡協
議会
- ◆『憲法はどう変えられようとしている？』伊藤真
大月書店
- ◆『高校生につなぐ戦争証言』高校生平和のつどい実行
委員会編 地平社
- ◆『何が問題か？次期学習指導要領』『何が問題か？
次期学習指導要領』編集委員会編著 メトロポリタン
プレス
- ◆『先生もすてたもんじゃないよ』全国民主主義教育研
究会編著 かもがわ出版
- ◆『子どもの意見表明権を実現する30の方法』
編者 喜多明人 合同出版
- ◆『平和教育ハンドブック』東京の民主教育をすすめる
教育研究会・平和教育ハンドブック編集委員会

季刊『人間と教育』のご購読をお願いします 定価：1190円＋税 発行：旬報社

- ◆131号 <2026年9月>
特集Ⅰ 高校改革のグランドデザインを問う
特集Ⅱ どうなるデジタル教科書
- ◆130号 <2026年6月>
特集 不登校三五万人時代の教育を問う
- ◆129号 <2026年3月>
特集 排外主義—その背景と教育の課題
- ◆128号 <2025年12月>
特集Ⅰ 「学問の自由」が危ない
—学術会議法人化の何が問題か
特集Ⅱ 教師の働き方と子育て親育ち

賛助会員 加入のお願い

民主教育研究所は

真理と真実に基づき、研究を通して広く教育に携わる者の実践を支えます。拠点として、1992年に設立されました。10の研究委員会・プロジェクトによって、研究が進められ、研究と実践をまとめた『年報』や季刊『人間と教育』を発行しています。

賛助会員になると

季刊『人間と教育』、「民研だより」（年4回）を無料で自宅に郵送。民研発行の書籍を各1冊、半額で購入可。会費は1万円（大学院生5,000円）です。

民研だより No.169 2026年9月10日

発行 民主教育研究所 発行責任者 中嶋哲彦
〒102-0084 東京都千代田区二番町12-1

全国教育文化会館 6F

Tel 03-3261-1931

Fax 03-3261-1933

Email office@min-ken.org

HP <https://www.min-ken.org>

